
レオンな気分

いなばさだかず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レオンの気分

【Nコード】

N8638C

【作者名】

いなばさだかず

【あらすじ】

都会の片隅でその日暮らし的な日々を送っていた一人の中年男性と、これといった夢も望みも無い十六歳の少女。渋谷で偶然に出会った二人がある事から事件に巻き込まれる。非日常的な出来事が、都会ではごく日常的に起こる・・・

第一話

金ナシ定職ナシ女っ気ナシ三重苦の私、賀千谷満（がちやみつる）は、言ってみれば社会からスポイルされた人間だ。本来なら郊外に一戸建ての家でも持ち、大学に通っていてもおかしくない子供と、気立ての好い妻に囲まれた生活を送っていてもよさそうな年齢なのだが、バブルが弾けて以来、それらとは無縁の生活をずっと送っている。

平成という時代になってからこの方、まともに一つの定職を持つた事が無い。

バブル真っ盛りの頃は、そこそこ優秀な営業マンと自負していたが、思い返してみれば、あの頃は普通にセールストークが出来れば、大概の人間がそれなりの給料を稼げてた。

大した学歴も財産も無い私の所に嫁に来た妻は、ある意味不運であつた。

五年近くの結婚生活を曲がりなりにも送っていたのだから、互いに愛し合っていたと思う。しかし、夫婦の最後は実に呆気無いものだった。

離婚の理由を強いて挙げれば、バブル崩壊と共に会社が倒産して、その事で生活が不安定になったのが一番かも知れない。

けれど、それは無理に付けた理由でもある。確かに、それまで勤めていた会社が消滅した事で、私が定まった職に就かず、生活の不安を妻に与えたのは事実だ。でも、それだけではない何かが二人の間に亀裂を生み、妻は実家に帰りその後、一枚の離婚用紙を送って来た。五年という時間は、私達を引き止める程の力を持つてはいなかった。

気楽になった独り身の私は、その後も定まった職に就く事も無く、その日暮らし的な日々を送っていた。気付いたら、もう五十という年齢になっていた。絵に描いたような人生の落伍者である。

それでも、東京という街で暮らしている限り、落伍者というよう
なはっきりした疎外感を感じる事は少ない。特に最近、ワーキン
グプアだの格差がどうのこうのといって、私と似たような若い者を
街のここで見掛ける。漫画喫茶にはネット難民と呼ばれる者が
溢れ、新宿の早朝サウナを覗けばいつも同じ顔触れと出会う。隅田
川のブル・シート
の住人達と何ら変わらないのだ。

四十代の前半までは、職を探すのにそれ程苦労は無かった。職を
選びさえしなければ、取りあえず食べて行く事は出来た。中目黒の
築三十年以上の風呂無し四畳半一間の生活も、贅沢さえしなければ
そこそこエンジョイ出来た。引き換えに、未来というものを諦めさ
えすればの話だが・・・。

さすがに、この所は極端に仕事が減っている。一般の求人雑誌で
は、殆ど自分に当て嵌まる仕事など載っていない。ハローワークな
どとうの昔に職探しのツールから外している。資格らしい資格の無
い五十男に職をくれる程、職安は親切では無い。

求人情報は、スポーツ新聞や夕刊紙から得た。そこには、ありと
あらゆる職業が載っている。高級優遇、面談即決とあり、誰が見て
も胡散臭げな匂いがぶんぶんした職業ばかりだ。が、年齢も前歴も
問われないとなれば、少々胡散臭かろうが飛び付くのが人情という
もの。詐欺まがいのやり方でお年寄りから大金を巻き上げるので有
名なりフォーム会社、新聞拡張員、風俗店従業員、デリヘルのドラ
イバー、闇金のテレフォンアポインター……。こんなのはまだま
ともな職の方だ。

ある時こんな求人があった。ドライバー募集、日払い三万以上と
あったので、とにかく急いで電話をした。

指定された喫茶店に行ってみると、私と同年輩の男が一人待つて
いた。その男は私が席に着くなり、

「貴方は秘密を守れますか？」

そう尋ねられて意味が良く判らないのですがと答えると、今は詳

しく言えないが、半日車を運転さえしてくれば最低三万即金で払うと言われた。危ない匂いに警報ランプは点滅しっぱなしだったが、その時はとにかく現金が必要だったので働く事にした。

その仕事はドロボーの運転手兼見張り役だった。男は、昼間の高級住宅街ばかりを狙う、プロの空き巣だった。一週間ほど仕事をしたが、さすがにそれ以降は断った。

こうしてその日暮らしをしている私の唯一の楽しみは、出逢い系サイトで知り合った女性とのメールのやり取りだ。会うのを前提にしてるわけではなく、メールのやり取りだけで充分私には満足であった。何となく学生の頃の文通を思い出したりして懐かしがっている自分が笑えるが。

サイトの殆どがサクラを使ってるのは承知の事。私自身が嘘の塊で作り上げた別人を演じているからだ。自分ではない架空の人物になると言うのは、ある意味、現実逃避なのかも知れない。売れない役者になってみたり、大金持ちのセレブに化けてみたりするが、時には自分に近い人間を演じてみたりする事もある。

おかしいもので、まるつきりこっちが会いたいとアプローチをしないものだから、むしろ妙に信用されたのか、誘われる事が結構多い。メールのやり取りで、この人なら会ってみたいと思う事も時にはあるが、現実の自分を晒す勇氣は欠片も無い。ネットの世界は、所詮バーチャルな世界だ。現実とコミットさせられる若さは、私には無い。尤も、相手だってサクラだろうし、中にはネカマが紛れてる可能性もある。稀に本当の女性とメル友になったりして、どうして会って頂けないのですかと、熱いお誘いを受けたりもする。世の中、欲する者には与えられず、望まない者に与えられるものなのだと、この年になって気付いた。

しかし、トム・ハンクスとメグ・ライアンのような出逢いはスクリーンの中だけの物語なのだ。

三回目の家出。

前は二回共一週間だけのプチ家出だったけど、今度は本気で頑張ってみようかなって思ってる。これといったアテがあるわけじゃないけど、取り敢えず渋谷に行ってみる事にした。

新宿はちよつとやばい系かなって感じで、好きじゃない。オシャレじゃないしね。

渋谷はクラブとかあるし、何より街がオシャレだもん。本当は、六本木とかの方がいいんだけど、アタシにはまだチョット早いかなって気がする。渋谷で女を磨いて、それから六本木デビューしようかなって考えてる有吉ナナ、あのナナと同じ名前でちよつぱりその気になっている十六歳の乙女、それがアタシ。

埼玉と千葉と茨城のド田舎トライアングルで生まれ育ち、地元の誰でも入れる高校に入学したけど、これといって面白い事も無い生活に飽きちゃってる今日この頃。

アタシの下着をこっそりタンスから引っぱり出して匂いを嗅いでいる三浪の二ートな兄貴と、パート先のカラオケスナックで夜毎、若いお客を逆ナンしている元ヤンのママ。それと、いつも影が薄いくせに訳の判らない時に突然キレル加齢臭親父。

こんな家族に囲まれてるのにいい加減耐え切れなくなって初めての家出をしたのが、中三の夏。一週間も居なかったのに、家の連中は特に心配するでもなくみんな自分勝手な生き方をしていた。

二度目の家出は、志望の女子高に落ちた翌日。結局、これも一週間であつたけどその時にいろいろと世間の仕組みを勉強したから、次に家を出る時はちゃんとするんだって心に決めてたの。周りの手前があつたから、一応滑り止めの高校には入ったけど、もうどうでもいいし。ファミレスのバイトで貯めた全財産を手にして、今日電車に乗ったんだ。

埼京線に揺られてバック一つで渋谷に来たけど、相変わらず人がメッチャ多い。改札出て道玄坂にネットカフェに行く途中で、三人のスカウトと二人のエンコー探しのオヤジに声を掛けられた。ちよつとメイクにリキ入れすぎたかな……。まあ、マイクロミニとラ

メ入りキヤミのこの姿じゃ男が寄って来るのも無理ないか。

そういえば、ピチピチ十六歳の生足を見せ付けちゃったせいで、渋谷へ来る途中の電車の中で、ずっとエロイ視線浴びてた。正面に座ってた中年のオジサンがチラチラと視線を寄越すのが何だかいじらしくなっちゃって、二、三回足を組み替えたりしてチョットだけサービスしちゃった。見ててこっちが判る位きよどつてたな。別にパンツ位見られるのはどうって事無いんだけど、エロイ視線で何時までもじっと見てんじゃねえよって、言いたくなる。やっぱキモイもん。男ってどうしてみんなエロイんだろう。まあ、女の子の中にもカオルみたいにチョーが付くヤリマンも居るけど。

ネットカフェに入って、PCのある個室に86、58、85のナイスバディを横たえる。

今日は、取り敢えずここがアタシのねぐら。早速PCをオンにして、ネットを開く。バックからチョトスを出して、フリードリンクのコーラと一緒にポリポリゴツクン。

さてさて、お小遣いをくれそうなジジイは居ないかなって・・・。

第二話

今日から仕事が変わった。久々に楽な仕事だ。通行人にサービスチケットを渡したりもするが、同じ場所ですつと立ってりやいいだけだ。

渋谷の道玄坂小路にあるカジノゲーム屋のプラカード持ちが新しい仕事だけど、本当にこんな楽して日給七千円貰っちゃっていいかなと思っただが、一週間もするとそれが誤りだと判った。

私がばら撒くサービスチケットでお客が入らないと、規定の金額は、払えないと言われた。日給七千円は、最低限の集客ノルマが達成されて初めて支給される金額だと言う。一人も客が来なければ、三千円しか貰えない。雨の日でも、ずっと傘を差して立っていなければならぬ。

もう直ぐ梅雨になる。その事を少しも考えていなかった。

それでも、週末で客が入った日などは、指が切れそうなピン札の福沢諭吉を手にする事が出来るし、気立ての好い店長が、時々飯を奢ってくれたりするので、少しばかり長く頑張ってみることにした。私の立場所は、道玄坂と、文化通りを結ぶ小路の角だ。ロイヤルホストと、風俗の無料案内所に挟まれたその小路を入った中程に、プラカードの店がある。

看板は出してない。違法カジノだからだ。バカラだけの店だが、この店は100%客が負ける仕組みになっているらしい。どういう仕組みなのかは詳しくは知らないが、客が一人でも入りさえすれば、従業員の日給が全部払える位なのだから、鴨を丸裸にするノウハウはきちんとあるのだろう。チラツと聞いた話なのだが、客が現金を全部すつても、近くにある系列の闇金を紹介してまで金を突っ込ませると言う。まるで死肉を貪るハゲタカのように、一片の肉片も残さず客から金をむしり取る。

貪られた客達を私は、可哀想だとか、哀れだと思った事はない。

ざまあ見ろという気も起きない。いたって無感動に、サービスチケットを手にした人間を見る。

夕方から明け方の五時頃まで、いろいろな人生が私の前を通り過ぎて行く。

未来に何の不安も感じずこの世を謳歌している若いサラリーマン達。B系ファクションで身を包んだ男女のグループ。円山町のクラブにでも行くのだろう。ダブダブのファクションにピアス、まるで日本人ではないみたいだ。ケータイを片手にブランド物のバックをぶら下げた若い女は、いずれも風俗嬢だ。明らかに場違いというか、不釣り合いなカップルは、これからホテルに向かう風俗嬢とその客。お水系の女や、ギャル系の子にやたらと声を掛けてるのは、ホストかスカウト。道玄坂上のマンションから、日に何度も自転車で降りてくる男は、裏DVD屋の従業員で、注文がある度にディパックにブーツを入れて店まで飛んで行く。怪しい中近東系の外人は、殆どが路上でのドラッグの売人。中国エステに客を引っ張り込もうと、やたらに声を掛け捲ってる小娘（シャオチエイ）達は、殆どが大連辺りからの日本語学校の留学生だ。彼女達は皆驚くほど綺麗で可愛い。この子達はキャッチ専門で、客には付かない。店に入ると、キャッチの子達の35%マイナス程の子がサービスをする。地回りのヤクザも、日に何度となく私の前を通り過ぎる。昔のヤクザほどはそれらしい格好はしてないといっても、全身から発する強面オーラは、どんなに己の素性を隠そうとしても無理だ。

そういった、いつもの顔触れの中に違った人間が混じると直ぐに判る。半日、何千何万という人間を目にしていると、十日もすれば大概の顔を憶えてしまう。

ナナという少女と出逢ったのは、プラカード持ちの仕事を始めて一ヶ月程経った頃だった。

アタシの収入源は、出逢い系サイトでエンコー相手を引っ掛ける事。

引っ掛けるといっても、絶対ウリはやらないんだ。ご飯して、お茶してバイバイがアタシのやり方。結構、これだけでも満足して何千円かのお金をくれる中年オヤジがいるんだよね。時々、洋服とかバックとかの小物まで買ってくれる好いオヤジもいて、取り敢えず食べるには困らない毎日。たまには無理やりホテルに連れ込まれたりすることもあったけど、どうにかアタシの処女は健在みたい。

マルキューの前で知り合ったヨシエちゃんから教わったのが、下着を売る事。ドンキで一番安いパンツを買って来て、穿いたやつを売るんだけど、汚れてれば汚れてるほど高く売れるからって、ヨシエちゃんなんかわざとトイレで拭かないで染みだらけにして売らしたいんだ。アタシはそこまでしない。お金の為とはいえ、目の前でパンツを脱いで相手に渡す時は、マジ恥ずかしい。

アタシが言うのも変だけど、この国って何か病んでるっぽい気がする。ニートの兄貴もアタシの下着を漁りまくって変な事してたみたいだし、世の中みんなキモイ奴ばっか。男という男が全部キモく思える。だから、ジャニーズ系のイケメンにも興味湧かない。却って、可愛い女の子を見るとドキドキする事がある。この頃、アタシはレズなのかなって自分が心配になっちゃって、将来に不安を感じたりもしてるんだ。だって、女の子に生まれたんだから、一度は純白のウエディングドレスに身を包んでお姫様抱っこされたいじゃない。出でよ私の王子様！ってのが、今の心境なんだけど、まさか、しばらくして知り合った汚えないオッサンが、アタシの王子様になるなんてこの時は思いもしなかった。誰が何と言ったってそう思える訳ないもん。だって、年の差が三十以上離れてるんだよ。アタシのパパより年上なんだから。それも、ジローラモみたいなチョイ悪系のカッコイイオジ様ならまだ判るけど、どう鼻屑目に見ても落魄れたジジイなんだもん。

けどね、アタシを地獄の底から救ってくれたのは事実だし、感謝もしてる。

そのオッサンと出逢ったのは、家出して三十日目、一日中雨が

シトシト降っていた日だった。

その日引つ掛けたエンコー相手がチョー最悪な奴で、会った初っ端からやりたいオーラ出しまくってた。

「幾らならホテルに行くんだ？二万？三万？君みたいに可愛い子なら五万でもいいぞ。」

「オジサン悪いけど、さっきから言ってるようにウリの方はやってないの。会ってお茶とかご飯付き合ってたまで。まあ、パンツ位なら今脱いで売って上げるけど、それ以上はダメ。五万が十万でも百万でも無理！」

そう言って何度も断ったけど相手はなかなか諦めず、

「じゃあさあ、何もしないから、ホテルで俺が一人エッチしてるのを見ててくれない？絶対、君の体には触らないから。ね、約束する、この通り！」

放つとくと道のご真ん中で土下座でもしそうだったから、仕方無しに、

「判った、でも絶対だよ、体に指一本触れちゃダメだからね。」

と言って、その男と円山町のホテルに入った。部屋に入るなり、男はTVのスイッチを入れ、AVのチャンネルにすると、あつという間にズボンを脱ぎパンツまでずり下げた。ゲッ・・・醜いものを見てしまった・・・吐きそうになるのを何とか我慢して、

「約束のお金、先に頂戴。」

そう言つと、男は財布からお金を出し、アタシの方へ差し出した。近寄つて手を延ばした途端、男にその手を掴れ、ベッドに転がされた。馬乗りになって来た男の手が、アタシの86センチDカップの胸を鷲掴みにした。

「顔は口りだけど、体はすっかり大人だな・・・こりゃあ反則だぜ。」

生まれてこの方、まだ誰にも触らせてない乙女の乳房をこんな男に揉みしだかれるなんて・・・って、そう思った途端、アタシはプツツンと切れた。思い切り男の顔を爪で引っ掻き、怯んだところで

体制を入れ替えた。止めは膨らました股間へのキック一発。散らばった一万円札を急いで拾い、部屋を出た。

まさか追い駆けて来るなんて思っていなかったから、ホテルを出た後はそれ程慌てずに歩いていた。そしたら、スケベ男の執念とは恐ろしいもので、そいつはゾンビみたいな形相でアタシを追い駆けて来た。

雨の中、とにかく路地から路地を逃げ回った。人通りが多い所に早く出なくちゃって思ったんだけど、ぐるぐる回っているうちにミユールが脱げて転んでしまった。

万事休す！

「助けてエ！」

こうやって叫べば、普通は白馬に跨った王子様が飛んで来るものもんだけど、この際、別に王子様じゃなくても構わない。どんな奴でもいい。緑色したシュレックだって・・・。

現れたのは、どう見てもケンカの弱そうなオッサンだった。

それでも邪魔者が入った事もあって、追い駆けて来た変態男は少し怯んだ。

「関係無い者は引っ込んでいてくれ。」

「助けてと叫ばれたら関係無いだのって言ってられないだろう。どいう理由があるのか判らんが、いい年をした大人がこんな子供を追いつけ回すなんて只事じゃない。」

「この女はドロボーだ。俺から金を取って逃げたんだ。」

オッサンがアタシの顔を見た。疑わしそうな表情をしてる。

「違う、ドロボーじゃないよ。この変態が、無理やりアタシをホテルに連れ込んで、いやらしい事をしようとしたんだ。」

「何がいやらしい事だ、何が無理やりだ、それで金を稼いでるエンコー女だろうが。」

「アタシは絶対ウリはしないって言ったじゃん。オジサンだって体には絶対、指一本触れないって土下座までしたくせに！」

「何を！」

「ストップ！ストップ！援交がどうのこうのってアンタは言ってるけど、それは本当の話か？」

「あ、ああ・・・」

「お嬢さん本当？」

「・・・うん。」

「年は幾つ？」

「・・・十六。」

「アンタ、これって犯罪になるんじゃない？淫行罪だよ。警察呼ばれたら塩梅悪いんじゃないの？」

「まあ・・・そうだけど・・・。」

「ねえ君、金は幾ら取ったの？二万円か、じゃあ、そのお金をこの人に返しなさい。」

「ええ！？返すの？」

「いいから、言うとうりにしなさい。さ、これでいいだろう。アンタの金は戻った。さて、今度は、この子に治療代と雨で濡れた服のクリーニング代を渡して上げなさい。転んで擦り剥いた程度だが、それなりの誠意を見せてこそ大人というもんだ。それとも警察を呼んできちんと全て話し合った方がいいかい？」

変態男は、渋々戻った金の中から一万円札を出し、アタシにくれた。そして、雨の中を走るように去って行った。

「オジサン、サンキュー。」

「どういたしまして。」

その言い方が可笑しくて、思わず笑っちゃった。緊張感が無くなった途端、急に膝が痛み出した。転んだ時に打ったみたい。

「大丈夫か？歩けそうかい？」

「うん、平気・・・だと思う。ちょっと痛いけどね。」

「何処まで帰るんだ？よかったら送って行くけど。」

「今夜はマン喫に泊まるから。」

「着てる物が濡れてるし、汚れてるよ。それに家で心配してるんじゃないのかい？」

「着替えなら駅のコインロッカーにあるし、家の方はどうでもいいの。」

「家出娘って事か？」

「ピンポン。」

「まあ、深くは聞かないし、どうこうしろとも言わないが、私も駅まで行くついでだから一緒に歩こう。万が一、さっきの男がもう一度君を追って来ないとも限らないしね。」

「オジサン、随分気が利くじゃん。ひょっとしてえ、オジサンも下心あり？」

「馬鹿を言いなさんな。」

「あは、きよどつてる。少しは当たったみたいだね。」

「いい大人をからかわんでくれ。人の好意をそうやって茶化すんだったら好きにすればいい。」

そう言つて、オッサンはすたすたと歩き出した。アタシは慌ててその後を追いつけ、オッサンの差す傘の中に入った。

「ごめん、怒らないでよ。冗談だから。」

おっさんは駅までの間、ずっと何も喋らなかった。八チ公前に来ると、

「私は東横線だから、こっちの方に行くよ。」

と言つて、自分が持っていた傘をアタシにくれた。

「ありがとう。」

礼を言つと、オッサンはニコツと笑つた。シワだらけになったその顔が、まるでチャウチャウみたいで思わず可愛いつて思つちやつた。もう少し二枚目の渋いオジ様なら、この出逢いも、より劇的になつて、それこそドラマや映画の世界みたいな展開になつて行くんだろうけど、どう見てもチャウチャウにしか見えない笑顔のオッサンが相手じゃ、大して期待は出来そうにもない。けれど、このチャウチャウがジャン・レノみたいに活躍してくれるんだから、世の中って判んないよねえ。

ちなみに、アタシはナタリー・ポートマン程美人じゃないけど、

胸は間違いなく勝ってる。

本当は、顔もそれ程負けてるとは思ってないけど・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8638c/>

レオンな気分

2011年1月8日15時00分発行